

弘前市立博物館竣工に際して

前川國男建築設計事務所 崎 谷 小三郎

津軽の文化を保存するという事は、実は津軽の「歴史的風土」を保存することに他ならないと思います。なぜならば「地域文化」とは、「地域社会」を母胎とせねば生まれぬものですし、その文化の特徴あるいは個性とは、即ち「地域社会」の特徴であり個性なのであるからです。したがって津軽における「歴史的風土」とは、津軽の自然条件の下で、津軽という限定地域に、人々が営み続けてきた共同の生活圏……つまり地域社会が、その永い過去の日常生活の営みのうちで創り出したものであります。それは過去において大いなる変化をなしたであろうし、また将来においても大いに変化を生むであろうところのものです。しかしその変化は常に創造を伴うべきものであるし、またその創造とは、この「歴史的風土」を土壌とせねば決して開花しないものであります。

今日弘前市立博物館の竣工に際して、ここに譬喩を申し述べて、設計者の呈辞と致したく存じます。それはこの博物館の敷地に就いてであります。

この敷地については、当初にその適否の諮問をうけたのでありますが、全面を野球場にはばまれ、南面は市民会館の陰に隠された、この湿潤の窪地は、窮屈で決して良好な敷地とは申しかねるものであります。この一帯は旧弘前師団が荒々しく利した跡地であり、その後も人々から永い間忘れられ、省みられずに、埋もれているような空間です。

しかしながら将来に追手門への展望をはばんでいる野球場の土坡が取り除かれ、博物館前面が解放されて、前庭計画が実施されるならば、この狭隘な空地もりっぱに「敷地」に利用され得ると判断されるに至りました。

今この埋もれた土地は、博物館建築を得て樹々の緑や土塁の姿が、今日の光のもとに、蘇がえりました。ロビーの窓を通して、その景観をご鑑賞ください。そこに「歴史的風土」があります。

津軽に関する歴史的資料は、いまでも数多く埋もれて、今日的光の照射を待っていることでしょう。それらに本来のあるべき価値を蘇がえらせる営為こそ、博物館の使命であり、活動だと思えます。

本日ここに竣工した建築は、その博物館活動の成果を証かす「場」であり、「装置」であるに過ぎません。

(1975年9月)